

## 氣多の神とは？ 出雲と高志をめぐるヒストリー（後編）

前編での問い「なぜ伏木の氣多神社には島根県と新潟県の神がまつられているのか？」について今回は探究してみましょう！

### ◆「古事記」にみる大国主命（大己貴命）

まずは、伏木の氣多神社の主祭神・<sup>オオクニヌシノミコト</sup>大国主命を見ていきましょう。日本に現存する最古の歴史書は「古事記」（上・中・下の3巻、712年編纂）です。そこには<sup>オホホノケ</sup>大己貴（後の大国主）が<sup>いづま</sup>出雲（島根県）で国作りをした、と記されています。

やがてその強大な国は、<sup>タカマガハラ</sup>高天原の支配者・<sup>アマテラス</sup>天照に譲られ、その際に大国主は立派な神殿をつくるよう天照に要請します。その神殿が現在の出雲大社です。そして「この世」は<sup>アマテラス</sup>天照大御神、「あの世」は<sup>オオクニヌシノミコト</sup>大国主命という神がそれぞれ支配するようになるのです。「あの世」を支配するとは、人の運命をつかさどることでもあるため、出雲大社は人びとから「縁結び」の信仰を集めているわけです。

さて、石川県羽咋市の氣多大社（能登国一宮）の社伝によれば、大己貴命（大国主命）が出雲から300余りの神と共に降臨し、大蛇などを退治し、海の道を開いたとしています。この伝承が羽咋の氣多大社のはじまりです。羽咋の氣多大社には、大己貴命の神のみがまつられています。この伝承から出雲と能登にはつながりがあったことがわかります。日本海には対馬暖流が流れています。対馬暖流は、人やモノ、情報をのせて運ぶ海の道です。北陸の冬の気温の急速な低下にも歯止めをかけてくれ、北陸が寒冷地にならないのは、この暖流のおかげです。伏木の氣多神社には、出雲の<sup>オオクニヌシノミコト</sup>大国主命がまつられていますが、これは奈良時代に羽咋の氣多大社から神霊を迎えたことがそのはじまりとも言われています。



現在の出雲大社



古代の出雲大社復元図



石川県羽咋市の氣多大社

### ◆ヒスイの支配者・沼河比売

次に伏木の氣多神社のもう一柱の主祭神・<sup>ヌナカワヒメノミコト</sup>奴奈加波比売命を見ていきましょう。「古事記」には「<sup>ヌナカワヒメ</sup>沼河比売（奴奈加波比売）という姫は<sup>タカシ</sup>高志（現在の北陸地方）に住んでいた。出雲の<sup>オホホノケ</sup>大己貴命（大国主命）がこの姫を妻にしようと思い、わざわざ高志へ出向き、求婚の歌をよんだ。姫はお返しに歌をよみ、二神は結婚した」とあります。つまり、大国主命と<sup>ヌナカワヒメノミコト</sup>奴奈加波比売命は夫婦の神なのです。そして、この神話は単なる結婚の話ではなく、出雲と高志という2つのクニが政治的に結びついたことを意味していると考えられています。

<sup>ヌナカワ</sup>沼河つまり現在の<sup>ヒメカワ</sup>姫川（新潟県糸魚川市を流れる川）流域では、縄文時代からヒスイが加工され、長者ヶ原遺跡や寺地遺跡などで工房跡が見つかっています。ヒスイは古代に貴重な

